



2025年度（令和7年度）

## 第3回「不登校を考える学習会」を開催しました。

2026年3月7日（土）

小郡市 人権教育啓発センター

演題： 「不登校から想像×創造する支援のあり方  
～ソーシャルワークの視点から～」

2025年度 最後となる 第3回「不登校を考える学習会」を3月7日（土）14:00より小郡市 人権教育啓発センターにおいて開催しました。

今回の講師に、福岡県立大学 人間社会学部 社会福祉学科 准教授の奥村 賢一（おくむら けんいち）さんをお招きし、「不登校から想像×創造する支援のあり方 ～ソーシャルワークの視点から～」というテーマでご講話いただきました。

今回の学習会には、28名の方にご参加いただきました。学習会の内容についてご紹介します。



### ○ 「支援は始縁」

はじめに、日本における不登校の歴史や現在の状況、また世界各国の現状についてお話していただきました。不登校児童生徒数は2024年度に353,970名と過去最高となりました。不登校傾向にある子どもの実態調査から見えてくる課題、そして、子どもたちからじわじわと生きる活力を奪っているという現状について、具体例を交えてお話していただきました。学校への欠席連絡が続くときの保護者のきつさや、子どもの「休み」を「ちょっと休憩」と捉えることで、ふっと心が軽くなる事例など、これまでの価値観を少し変えていくことで状況が改善された例がとても参考になりました。

### ○ 子どもにとって今の「基地」はどこでしょうか…？

次に、なかなか学校や教室に入れない子どもたちについて「安心基地」、「安全基地」、「探索基地」という段階を追いながら説明していただきました。学校や教室の危険を取り除くことで子どもたちが「安心」を感じながら過ごすことができ、「安心」の積み重ねが「安全」の環境をつくります。その「安全」が確保されてはじめて、子どもたちに「探索」できる力が湧いてくることについてお話ししてくださいました。また、特別支援教育の観点からインクルージョン（包括）とインテグ



レーション（結合）について、日本と海外のちがいなども交えながら説明していただきました。また、増え続けている特別支援学級在籍者への関わりや、不適切な関わりを通して二次障害を引き起こすことなど、不登校児童生徒への対応の基本を「登校しない児童を減らす」から「登校したい児童を増やす」という視点を大切にし、子どもたちの大切な受け皿になっている学校をプラットフォームにした取り組みについて、先生がこれまで関わられてきたご経験も踏まえてお話ししていただきました。

## ○ 子どもの「権利」と「ウェルビーイング」の視点から

子どもたちには様々な「権利」があります。児童の権利に関する条約や子ども基本法の制定など、子どもを取り巻く状況に大きな変化がみられます。一方で、子ども「当事者」を抜きにした話し合いや取り組みが進んでいないでしょうか？という提案がなされました。教育を受ける権利と合わせて、子どもたちの未来に目を向け、「自立」を支援していくため、私たち大人の役割について改めて考える機会となりました。豊かな、関係性（依存先）をたくさんつくり、つながりを大切にしていきながら、大人にも子どもにも「安心できる人間関係」や「安全な場所」、「探索できる社会」の実現の重要性を強く感じました。



### 参加者アンケートより

- 実際のケースなども挙げていただきながらのお話で、とても分かりやすく聞かせていただきました。学校として「あたり前」になっているもの、様々なことを見直していかないといけないと思いました。
- SSWの役割についてお話していただいてとてもよかったです。小郡市ももっとSSWを増やしてほしいと思います。
- 「支援は始縁」のことばが心にのこりました。どれだけその子のことが気になるか、その子のためにどうしたらいいのかを考えることが大事なんだと感じました。
- 学校でもケース会議に参加しますが、子ども本人は不在なので、「本人はどうしたいか」「あなたはどうしたいの？」と思いながら接するようにしています。
- 「子どもをひとりの人として向き合う」ということが心に残りました。私もまだまだ子どもは支えるもの、という気持ちが強いことを改めてふり返ることができました。子どもの思いを尊重することをもっと意識していこうと思いました。

